

モンゴル考古学プロジェクト 2022（令和4）年度における研究成果のあらまし

いまから約 800 年前のこと、東北アジアの片隅にいた遊牧民の集団にチンギス・カンというリーダーが出現し、瞬く間にユーラシア大陸の東西にまたがるモンゴル帝国という巨大な国家を造りあげました。

モンゴル帝国には、破壊と殺戮という負のイメージが強いですが、信教の自由などで民族の融和に努め、交通網を整備して通商を発展させたというプラス面もありました。東西世界の結びつきを強めたことで、大航海時代の序章、あるいはグローバル化の先駆けと評する研究者もいます。宗教や民族間の対立が深刻化している現在、いかにして持続可能な世界を創り出すことができるか。モンゴル帝国の歴史から学べることは、少なくないと思います。

ただ、モンゴルの遊牧民は、自分たちのことを文字に残しませんでした。反対に、食物の残滓や住居跡といった「モノ」は数多く残しました。私たちはそうした「モノ」を通して、モンゴル帝国の実態に迫ろうとしています。それが「モンゴル考古学プロジェクト」です。

モンゴル考古学プロジェクトでは、モンゴル科学アカデミー考古学研究所と協定を結び、チンギス・カンが拠点を置いたモンゴル国アウラガ遺跡で発掘調査をおこなっています。



2022（令和4）年度は、1棟の建物跡を完全な状態で発掘しました。カマドや床下暖房などの設備が整った立派な建物で、居住者は、優れた細工の象牙の櫛を用いた、身分の比較的高い人物だったようです。炭素 14 法により建てられたのはチンギス・カンの死の直後とわかりました。

アウラガ遺跡はチンギス・カンの死後、彼を慰霊する祭祀場になりました。今回発掘された建物は、すでに明らかになっているチンギス・カン霊廟に隣接しています。その居住者は祭祀を司った人物だったと思われます。

2027 年には、チンギス・カン没後 800 周年を迎えます。本プロジェクトでは、発掘などモンゴルでのフィールドワークを中心にして、謎の多いチンギス・カンの実像に迫りたいと考えています。2023 年度は、三菱財団の支援を受けて、霊廟の調査をおこなう予定です。

また、本プロジェクトの成果も収録され『モンゴル考古学概説』という本が 2022 年 12 月に出版されました。あまり紹介されることのなかったモンゴル高原の考古学を、石器時代からモンゴル帝国まで時代順にわかりやすく解説しています。



文責：白石典之